地方小出版情報誌
アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

大人気パズル「数独」の知られざる可能性

「じぃじとばぁば　ようこそ数独！」発刊、予想以上の反響

文・「ニコリ」編集長　安福良直

数独は、ニコリが最初に名付けて売り出したパズルで、日本では30年前から楽しまれていましたが、世界的ブームになったのは２００６年ごろ。ロンドンの新聞に載ったのをきっかけに、あっという間にアメリカ、ヨーロッパに広まり、２００７年ごろには日本でも大人気のパズルになりました。今や世界で百カ国以上に広まり、何億人もの人々がSUDOKUを楽しんでいます。書店にも数独本のコーナーが確立されていて、これは日本だけでなく世界の多くの書店でも同様です。

ブームから十年が経ち、ニコリは数独の名付け親として、数独のパワーや可能性はもう十分に理解できたと思っていたのですが、いや、まだまだ数独には知られざる可能性があるのではないか、ということに気付かされる出来事がありました。それが、今回紹介する「じぃじとばぁば　ようこそ数独！」の誕生につながるのです。

「じぃじとばぁば　ようこそ数独！」
ニコリ刊・Ａ５判・本体500円・ISBN978-4-89072-900-5

東日本大震災の復興支援活動のなかで分かったこと

２０１１年に起きた東日本大震災。津波で東北地方の太平洋側の市町村は甚大な被害を受けました。岩手県大槌町もその1つ。震災後、数多くの方々が被災地を訪れて復興支援活動をされてきました。東京都に在住する川上誠さんも、２０１３年春から大槌町を定期的に訪れ、高齢者自立支援活動を現在に至るまで続けています。被災地では、住んでいた家が流され、別の場所に新しい住居ができて形の上では復興が進んでいても、元から築かれていた地域のコミュニティーが崩れてしまい、寂しい思いで生活されている高齢者の方がいっぱいいらっしゃいます。そんな高齢者の方々を支援するために、川上さんは施設でまちがい探しなどのパズルやなぞなぞを出題したりしてきましたが、その中でも特に楽しまれたのが数独です。川上さんの、熱心でかつていねいな説明を定期的に受けていくうちに、１人また１人と数独に熱中する高齢者が増えてきました。

ところで、書店で売られている数独の本は、おもに数独が好きな人に向けて作られたものです。ニコリもその例に漏れず、「初級者向け」「中級者向け」「上級者向け」とさまざまなレベルの数独本を出してきましたが、初級者向けと言っても、それは「数独愛好者」の中のやさしい問題好きな人向け、の本でした。数独は９×９の81マスを1から９までの数字で埋めるパズルですが、出題されているものは、半分以上のマスが空いているものがほとんど。新聞や雑誌に載っている数独も、ほとんどがそうだと思います。こういう数独は、愛好者ならスラスラ解けるものですが、「数独というものを今まで見たことがなかった」という方や、「数字は見るのも嫌い」という方にとっては、どこから手をつければいいのかさっぱりわからない、というものでもあります。

「このマスに1を入れてもいいし、2を入れてもいい」というときに、当てずっぽうで入れるとあとでまちがいの元になるのですが、1が入ると思ったら1を入れていき、しばらく進んで行き詰まってやめてしまう。それで数独を解かなくなってしまう。実は多くの方がそういう経験をしているのかもしれません。

誰でも正解の喜びを感じることができる「数独」の必要性

大槌町で、川上さんが数独を教えている高齢者の方々も、ほとんどがそういう方でした。どこから、どの数字を入れていいのかわからない。ということは、書店で売られている「初級者向け」の数独でも、難しすぎるのです。

私はニコリ刊「数独通信」の編集長をしていて、積極的に数独を勧める活動をされている方（まだごく少数ですが）と交流を持つようになり、その中で川上さんとも知り合いました。そして、今年1月に初めて川上さんの活動に同行。実際に大槌町に行って高齢者の方々と数独を楽しんできましたが、その場で川上さんにこんな提案をされました。

「書店で売られている数独本は、ここで高齢者に教えるには難しすぎます。だから、高齢者にも教えられるような、最初から数字がたくさん入った数独の本を作ってくれませんか？」

私もこの場所で数独を教えていて、高齢者のみなさんが数独を心から楽しんでいること、数字を入れまちがえても先へ進もうという意欲、そして実際にすごくまちがえやすいということ、などを感じ取りました。そして、誰もがまちがえずに最後まで数字を埋めていけるような数独、誰でも正解の喜びを感じることができる数独、の必要性に気付いたのです。

発売半年で初版の倍近い部数が出る

そうして生まれたのが、この「じぃじとばぁば　ようこそ数独！」です。

この本に載っている数独は、最初は８割くらいのマスが埋まっているくらいの問題から始まっています。１から９までで入っていない数字を探せば正解、というところからです。１冊に40問載っていますが、最後のいちばん難しい問題で、空いているマスがようやく半分を超えるかどうか、というところ。この本の最後の問題が、これまで書店で売られている「初級者向けの数独本」の最初の問題。そんなやさしい問題ばかりを載せました。

「じぃじとばぁば　ようこそ数独！」を発行したのが今年の４月20日。大槌町の高齢者の方々にはたいへん喜んでいただいて、それだけで十分うれしいことですが、その一方で、書店で売れるかどうかについては、半信半疑でした。数独ブームも落ち着いて、今、書店の数独本コーナーを訪れるのは、ほとんどが数独の愛好者かな、と正直そう思っていました。ということで、発行当初は一部の書店での展開で様子をうかがっていました。

しかし、大槌町以外でも予想以上の反響をいただき、さらにテレビ、新聞などマスコミに取り上げていただく機会もあって、発売半年で初版の倍近い部数が出る、という状態になっています。たいへんありがたいことだと思う一方で、ひょっとしたら、これまで数独本のコーナーで、数多くの方が本をパラパラめくっては「数独ってどんなものかと思って来たけど、これは自分には難しすぎる」と思われて人知れず去ってしまっていたのではないか、という思いもあります。「じぃじとばぁば　ようこそ数独」が、そんな方々を再び数独本のコーナーに呼び戻すことができれば、それは素晴らしいことではないか、と考えています。

幅広い層に向け「数独練習帳１」刊行

ところでニコリとは別に、数独の普及を目的に活動を行っている一般社団法人「日本数独協会」という団体があり、実は弊社社長の鍛治真起が代表を務めていたりします。その日本数独協会が、川上さんとの交流を深める中で、数独を頑張っている方々の努力を認めるような感じの「数独認定試験」を開催しました。開催地はその大槌町で、第１回は９月９日（数独の９マスにちなんだ？）。やさしい数独を、制限時間内に正解できた題数にあわせて級を認定する、というもので、当日は町外、県外を含めて百人以上の参加者が集まり、マスコミも数社取材に駆けつける中で開催され、たいへん盛り上がりました。大槌町では、百歳近い方が「生まれて初めての試験」を受ける、というケースがすごく多く、本当に真剣に取り組まれていました。今後、この認定試験の広まりにも注目したいと思います。

「数独練習帳１」ニコリ刊・本体500円
・ISBN978-4-89072-899-2

ニコリでは、「じぃじとばぁば　ようこそ数独！」とほぼ同じレベルの数独本として、「数独練習帳１」を11月に発売します。高齢者だけでなく、幅広く数独を楽しんでいただきたいと考えていますし、まだまだ数独の可能性があることに驚かされます。

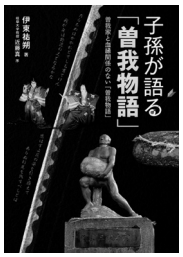
＊

（あんぷく よしなお／「ニコリ」編集長）

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率８%）表示です。

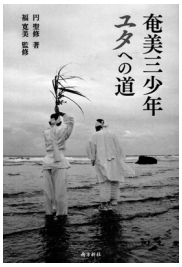
『子孫が語る「曽我物語」』●伊東祐朔著



曽我十郎・五郎兄弟による仇討事件は能や歌舞伎の題材にもなり、同じ日本三大敵討ちの一つである忠臣蔵ほどではないが、日本人には馴染みのある歴史的事件といえよう。兄弟の父・河津祐泰（通）を殺害した八幡三郎は工藤祐経の郎等であり、事件の背景には所領争いがあった。河津氏も工藤氏も同じ伊東氏であり、源平内乱期とも相俟って争いは複雑な様相を呈した。復讐を誓った兄弟は、源頼朝主宰の富士裾野の巻狩で祐経を討取る。後世、親孝行の鏡としてもてはやされ、近代になると国定教科書に載せられて天皇制下の道徳教育の格好の題材とされた。本書は、伊東氏の末裔である著者による「曽我物語読本」である。所々で著者の率直な感想や疑問が挿入されるなど楽しく読めて入門書として最適である。曽我兄弟と同じ境遇だった美作国の武士・漆間時国の子は、争いの連鎖を断ち切りやがて聖者となった。その名を法然という。相反する二つの生き方に中世人の苦悩を見る。

◆1200円・A５判・152頁・**垂井日之出印刷所**・岐阜・2017/8刊・ISBN9784907915070

『奄美三少年　ユタへの道』●円　聖修著



奄美でユタとしての仕事をしながら、占い師等の顔も持つ著者による自伝的作品だが、著者と同じくシャーマン的な資質を持った友人二人との交流を中心に綴られている。その友人の一人「平少年」は高校時代、学校で神懸かりとなってしばしば周囲を驚かせた。ある時担任の教師が校長室に呼ばれ、少年を退学処分とするよう言われる。担任教師は「彼はこの土地に古くから伝わる神障（ざわ）りではないかと思うのです」と食い下がるが、「なに！神障り、ユタ…君は正気かね？」と校長は嘲り、「脳病院に…」などと言いだす。しかし、担任教師は平少年を親身になってケアし、彼のユタとしての資質を自覚させることになる。もしも地域社会にシャーマニズムの伝統が残っていなかったら、平少年はこの校長のような人物によってただの病人にされていたことだろう。他にも3人が体験した不思議なオカルト的現象が多く語られるが、このエピソードに見られるようにシャーマニズム研究や地域文化、教育といった多視点で読むことが重要だろう。

◆1620円・四六判・155頁・**南方新社**・鹿児島・2017/10刊・ISBN9784861243691

『ぶらり「観光と歴史」の旅』●高橋倭子著

心赴くままに日本各地の名所旧跡を巡る、雑誌『歴史研究』の連載「ぶらり［観光と歴史］の旅」が一冊の本にまとまりました。北は青森から南は鹿児島まで全国津々浦々、十年で百カ所、著者が訪れた土地の歴史と見所が紹介されています。天空の城として知られている但馬竹田城址や青森のねぶた祭り、京都の寺社仏閣など誰もが知っているような有名な場所もさることながら、知る人ぞ知るような場所へも足を伸ばしています。キリストの墓と伝わる遺跡のある青森県新郷村戸来では、何故ここにキリストの墓があるのかを現地に伝わる伝承をもとに解説してくれます。また広島県福山市ではその遺跡の保存状態から東洋のポンペイともいわれる、かつて芦田川の中洲に発展した草戸千軒の遺跡も訪問しています。メジャーな観光地からマイナーな街まで、該博な知識に基づく紹介を読むと、日本国内にもまだまだ注目すべき面白いものや歴史が眠っていることに改めて気づかされます。

◆1296円・A5判・221頁・**歴研**・東京・2017/9刊・ISBN9784865480603

『新宿、わたしの解放区　増補版』●佐々木美智子著

学生運動の嵐が吹き荒れた1960年代後半から70年代、新宿ゴールデン街で、左翼のみならず右翼の活動家も、金持ちも貧乏学生も、有名無名の文化人も、時に公安までが紛れ込む、まさに「解放区」というべきバーを営み、デモが始まれば先頭に立って機動隊が学生に暴力を振るわぬよう写真を撮りまくったおミッちゃん。聞き書きによる本書初版の半生記（2012）が刊行された時、伊豆大島で20年近い時を過ごしていた。80歳になった2014年、再びゴールデン街に帰ってきた。献体をするのに離島では困難というのが理由だ。新宿で出会った人たちの顔写真集を作りたいとの思いもある。店はたちまち懐かしい仲間の居場所になり、ＮＨＫ『小さな旅』にも登場した。ゴールデン街は随分変わってしまったが、世代や職業に関係なく肩寄せ合って会話するにはちょうどいい街だという。初版で80歳で結婚と語ったことは90歳に訂正と、戻ってからも天真爛漫の日常を加えた増補版。

◆2700円・四六判・287頁・**寿郎社**・北海道・2017/8刊・ISBN9784909281012

『サンショウウオ戦争』●カレル・チャペック著／栗栖茜訳

赤道直下スマトラの少し西にあるタナマサ島。真珠採取を命じられたオランダ船のヴァン・トフ船長は海中で二本足で歩く魔物の話を耳にする。その魔物こそがサンショウウオで、利口で人慣れしているのを知った船長は彼らを真珠採りに利用して、同郷の実業家ボンディ氏に事業を持ちかける。やがてサンショウウオたちは様々な技術や言語を身につけていくが、ついに迫害に耐えかね、人類に戦いを挑み始め、砂丘を海に変えて行く。間にはボンディ氏の執事が集めた資料でサンショウウオの歴史なども語られるが、最後に執事はこんな不穏な事態を招いた責任を感じ、孫たちに許しを請う。

80年も前に書かれた小説だが、決して古さを感じさせず、現代世界をも見事に諷刺している。1700年代に人間の化石とされていたものが実はサンショウウオの化石と判明したエピソードから題材にしている。久々の新訳で生まれ変わった傑作で人類が今後何をなすべきか今一度考えたい。

◆2808円・四六判・492頁・**海山社**・東京・2017/10刊・ISBN9784904153116

売行良好書　期間：2017年10月15日～11月14日

［出荷センター扱い］※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(2)『図書の修理とらの巻』1404円・澪標　(3)『毒毒植物図鑑』1944円・南方新社　(4)『忘却の引揚げ史』2376円・弦書房　(5)『覚醒せよ、わが身体。』1944円・ハーベスト社　(6)『ぼくはこうやって詩を書いてきた』3024円・ナナロク社　(7)『獄中閑　我、木石にあらず』2700円・ＴＡＯ　ＬＡＢ　(8)『京近江の武将群像』1620円・サンライズ出版　(9)『アカデミック・ハラスメントの解決』2160円・寿郎社　(10)『玄洋社とは何者か』2160円・弦書房　(11)『赤ずきんとオオカミのトラウマ・ケア』1944円・アスクヒューマンケア　(12)『糖尿病は”砂糖”で治す！』1944円・鉱脈社　(13)『物語の森へ』3888円・東京子ども図書館

［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『昭和プロレスマガジン　４４』1000円・昭和プロレス研究室　(2)『東京かわら版　１１月号』600円・東京かわら版　(3)『本の雑誌　４１４号』720円・本の雑誌社　(4)『ニホンという滅び行く国に生まれた若い君たちへ』1620円・白馬社　(5)『放射能が降る都市で叛逆もせず眠り続けるのか』1836円・白馬社　(6)『石見の山城』2160円・ハーベスト出版　(7)『古典名作本の雑誌』1728円・本の雑誌社　(8)『四国の近世城郭』1836円・岩田書院　(9)『奇跡のシェフ』1512円・上毛新聞社　(10)『死民と日常』2484円・弦書房

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(2)『わたくしが樹木であれば　歌集』2376円・青磁社　(3)『ＯＫＩＮＡＷＡ　ＴＲＩＰ　２０１７－２０１８』1080円・編集工房東洋企画　(4)『写真帖　秋田の路面電車』1944円・無明舎出版　(5)『アカデミック・ハラスメントの解決』2160円・寿郎社　(6)『遅れ時計の詩人』2160円・編集工房ノア　(7)『対談　私の白川静』1000円・エディシオン　(8)『野笑』1728円・澪標　(9)『木村草太の憲法の新手』1296円・沖縄タイムス社　(10)『忘却の引揚げ史』2376円・弦書房

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

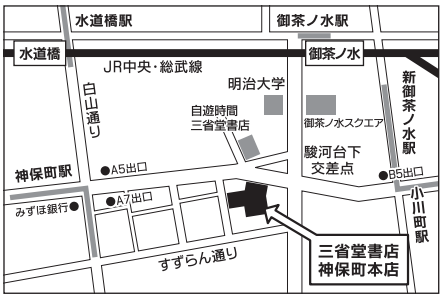
▼今年、**地方出版文化功労賞特別賞**を受賞した**『北の詩と人―アイヌ人女性・知里幸恵の生涯』**著者のご子息から受賞の言葉が届きました。授賞式開催を告知した先月号に間に合いませんでしたので、以下に掲載させていただきます。

【この度は鳥取県の皆様から多大なる評価をいただきありがとうございます。また感謝申し上げます。父・須知徳平（佐川茂）は、旧制盛岡中学校時代に作家を志し、同郷の金田一京助氏がアイヌ語の研究をすすめていく傍ら、親しくさせていただくとともに、お世話になっていました。若かりし頃、父は、「先生と知里幸恵さんとのことをぜひ私に書かせていただけませんか」と、生意気にもお願いしました。金田一氏は、「そうかい、君が書いてくれるのかい。幸恵はね、とっても素晴らしい娘なのだよ。本当にありがとう」と何回も父に感謝の言葉を述べてくれたそうです。作家として、多忙であった金田一氏から「知里幸恵さんに関係する書簡資料等」を借り受け、この物語を書き上げることができました。その後、岩手日報社の新聞小説に掲載されることになったのです。生前、「この物語は、どうしても単行本にしたい」と何度も願っておりましたが、叶わず、死後になってやっと刊行することができました。この受賞を機に、多くの方々にこの物語を読んでいただきたいと願っております。以上、受賞の挨拶とさせていただきます。（長男：須知結太郎＜スチユウタロウ＞）】

郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。
★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

三省堂書店　営業のごあんない
BOOKS SANSEIDO
神保町本店 4階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM ～ 8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。



地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。